こしやの光

生死の巻

前　篇
霊魂不滅の証明……一
輪廻説と佛教……四
生及び死の状態……一六
中有の説……二〇
十二因縁の教義……二五
勝論学派の霊魂論……三一
数論学派の霊魂論……三五
後　篇
鎌倉に於ける上人の片鱗……四七
辨栄御上人の御臨終の御様子……四七
行誠上人の袈裟附属……五〇

霊魂不滅の證明

（註。本稿は聖者の御法弟塚田僧正の住職地館林祿導寺より最近に出でしもの。字體に疑あれど僧正の證言によりて玆に採錄す）

何れの宗教も霊魂不滅を説かざるはなし。哲學上より云ふ時は無霊魂の意識と稱して、無霊魂を説きつゝ心的作用を説明せんと企つるものあれども、宗教に於ては殆ど有霊魂説なり。霊魂不滅論なり。されど宗教中に於ては、佛教内には、或意味より云へば無霊魂と稱せらる可きの説あり。之は後に譲り今は不滅説に就て古來如何なる點より霊魂不滅を稱道せしかを叙す。

印度古代の婆羅門教は霊魂の不滅を説く。基督教も不滅説なり。佛教の殆んど全部もまた不滅論なり。されどその不滅を説くも説明の模様は大に異なる所あり。婆羅門教は死後の轉生を言へどもその新に生せし時には以前生活せし爲の「我れ」なる自覺が有りしや否や詳かならず。

基督教は自己の意識即ち今日の自覺を以てそのまゝ天堂に生るべしと教ふ。

佛教に於ては菩薩及び佛の如き人間以上の地位に到れば幾度その形骸を變ゆるとも明かに自己の自覺的意識ありとすれど、普通の人類にありてはすべて形骸を更ゆる時、自己前身の意識を失ふものとし、名けて隔生卽忘（法華玄義六之二四十七丁）と云へり。生時の苦痛により自覺を失ふの意なり。

そは兎に角今玆に西洋學者に依りて説かれたる霊魂不滅の證明なるものを見るに略左の如し。

一に、植物などに比較するに彼等は霊なきが故に隨意運動なく、人も霊なき時は草木の枯死して僵れ仆ると異なることなし。（是れ等は尤も原始時代の人も考へしものに近し。）

二に、世に無數の人類あり各自に自己の目的を達せんとして生活しつゝあり乍らも多數の個體は自己の目的を充分に達せずして死しつゝあり。故に是非共來世の生活を要す。

三に、神は人に霊魂を授けたるはその本意かくの如く目的をも達せずして死せしむるためにあらず。若し來世なくんば神の本意に反す。（基督教に云ふ所なり。）

四に、若し來世霊魂の連續的生活を語らざる時はこの世の道德なるものは不充分たるを免がれず。（カントの説も之れに歸す。「廣弘集」に支那東晉の時靈山惠遠が現報生報後報の三報説を説いて佛教の霊魂不滅を善惡因果の理に依りて説明せんとせしは亦是の類なり。

六には、現在の世界には善惡の行爲に依りて幸不幸を受くるの規律正しく行はれ居らず。故にこの世の幸不幸を補はんため是非とも來世の生活なかるべからず。（佛教を信ずる儒家が多く顏回の貧にして夭なること盜石の富んで壽なることを引て霊魂の不滅を證するは是の類に屬す。）

七には、人に向上の精神を具ふ。進んで止まざる精神あるはまことに霊魂不滅の證しなり。

八には、凡そ物が一度成立すれば途中に滅無するものにあらず。我等が精神も一度成立する上は僅かの死と云ふことによりて滅するものにあらず。

九には、集合して成るものなれば解散して消滅することあるべし。精神は純一なり。死と言ふ事によりて破るゝものにあらず。

十には、精神力は身體力と異なる作用を有す。されば身體は離散するとも精神は消滅せず。たとひ死後に靈魂は天堂に至るにせよ、中有に彷徨ふにせよ、他の肉體に宿るにせよ、死後に個體的靈魂ありと云ふは、多く是等の思想を以て根基とするものなり。

輪廻說と佛敎

輪廻說とは死後靈魂がめぐり〳〵て他の肉體に宿ると云ふことにて、何處何時にても動物界をめぐりて自己の住處を求むる故に更らに消滅するの時期なし。西洋學者は之れを稱してメテンプシホーゼと言ふ。メテンは超越を意味する希臘語にして、プシホーゼは精神を意味する希臘語なり。されば肉體を超えはなれて精神の獨立恒久を顯すものと言ふべし。西洋にても古のピタゴラス、プラトー、及び近代のショッペンハウエル氏の如き是の說を主張するものゝ如し。

佛敎の思想は輪廻を基礎とす。されど輪廻說として最も明白に「我れ」の恒久を語るものは、佛敎以前の勝論學派及び數論學派に於ける「我」論なり。純一にして肉體力に異なりたる一種の存在物なり。死と俱に消滅するものに非らず。佛敎より名けて常一主宰の我と言ふ。梵語に言ふ富持伽羅にして、直譯するときは數取趣と云ふ。數取趣とはしばしば趣を取ると言ふ義にして、地獄餓鬼修羅畜生人間天上など云ふ如き靈魂の宿る可き肉體界なり。

但し數論派にては、最上を天とし最下を獸及び草木界として三界を立つ、種々の肉體に宿り種々の種類に生るゝことを意味し、かゝる純一にして而も永久に輪廻して無

窮なる而も主宰の意義を有する是の三箇條件を具ふるものを意味して我と言ふなり。

されば同じ我れと言ふ文字を用ふれども、この我れは佛敎に云ふ假りの我(代名詞)及び眞の我れ(涅槃の大我)とはその意味を異にし、今日の西洋學者が言ふ自識及び主我(ゼームス氏の主我客我)などとも稍やその意味を異にするものと言ふ可し。是の勝論及び數論學派の我は如何なる物體なるか、及び如何にして恒久なるかは、古歌に、「引きよせて結べば柴のいほりにて解ればもとの野原なりけり」とある如く、すべて身體の組織を五種に分解し、色受想行識の五種を除きては更らに靈妙不可思議の一物を存せず。

色とは物質なり。受と想と行と識は精神作用なり。是の物心兩界の材料が相集りて生活運動の狀態を爲せる事、恰も瓦石木土の種々なる材料を集めて一箇の家を作り成す如しとす。家を解散すれば殘り存するものは瓦なり石なり木なり土なり。人も亦是の如し。死と云ふ解散期に遇ふ時は五物分散し物心隔離し各自その本源に歸るべし。人もなければ靈もなし。

さらば佛敎にては精神即ち識なるものめぐり〳〵て輪廻轉生し、他の肉體に移り住むことはなきかと云ふに決して然らず。

若し他の肉體に移り住むと云ふ事を以て輪廻なりと云はゞ、佛敎は輪廻說にあらず。されど新になる他の個體的なるものを造り起すことを以て輪廻と云ひ得べくば、佛敎の說も亦輪廻說と云ふべし。

然らばその他の個體即ち新らしき生活を起すと言ふことは抑も何者の働きで。色即ち物質か、心即ち識なるか、二者俱に非なり。玆に於てか業の說あり。

各宗各派に於て業の說明は稍や異なりと雖も、要するに業とは我等が生存中に身體と口と意とを以て種々なる活動を起せし一種の痕迹なり。沙上に印せし足迹は須臾にして消滅すべしと雖も、我等が行爲と辨舌と思考とによりて留めし無形の痕迹は容易に消滅するものに非らず。精神上に刻せし業なるものは、火燒く能はず、水濕す能は

ざる底のものにして、電氣以上エネルギー以上の活用あり。潜んでは有無すら分明ならずと雖も、一度發芽の期に會する時は、無限界より材料を曳き來りて再び生前に同じき種々なる個體を形成せしむ。若し父母のみが兒を生ずと云はばそは俗諦の見解にして、あまりに原始的なり。基督敎は肉の父母の外に天の父を敎ふ。佛敎は天の父を說かざれども無明を父とし業を母とすと謂ひ、肉以外に天帝以外に無明と業なる父母ありと敎ふ。無明は水の如く業は種子の如し。業の種子は無明と云ひ惑の水田に入り是處に人間或は畜生餓鬼なんど云ふ個體の芽を出し、根幹枝葉を開くものなり。されど種子の喩は全きものに非らず。業は種子の如く枝葉を出すべき根源にあらずして無限の材料中より芽となり根となり枝葉となるものを集め起さしむるの特異なる力なり。稱して業力と言ふ。佛經中に善の業力は人間又は天の果報を引き、惡の業力は地獄又は餓鬼畜生の果報を引くと云ふ卽ち是の意味なり。

再言すれば、善業力に依りて人又は天の果報を引き起すと云ふは、善業力に依りて五蘊の材料を集めて人又は天の個體を引き起すと(構成せしむ)と云ふことなり。惡業力によりて地獄又は畜生の果報を引き起すと云ふは、惡業力によりて五蘊の材料を集めて地獄又は餓鬼畜生の個體を構成せしむと云ふ事なり。是故に善因樂果惡因苦果とは言ふものゝ、佛敎敎理より嚴密に云ふときは、因是善惡、果是無記の法則と稱し、原因の業は善か又は惡なれど、その果報なる材料は善にもあらず惡にもあらず、稱して無記と云ふ。されば無記の材料によりて無記の果報を作るものにして、善惡苦樂とか云ふことは增上緣と增上果の分齊にあるものにして、換言すれば主觀上の判斷によりて、善業惡業、苦果樂果と名くるものにして、材料即ち客觀の存在は全く非善非惡なり。

無明を父と！業を母とすと云ふものゝ、全く勢力あるものは業なり。是の業は肉の父母以外に於ける靈の父母なり。靈の父母とは云ふものゝその起源を尋ぬるれば、まさしく自己の活動より起りしものに外ならず。されば極言するときには、自己よく自己を作るものにして、自己以外更らに父母なし。

大無量壽經に曰く、

獨り生れ獨り死しひとり去りひとり來る、誰れも代るものなしと說きしは、よくこの意味を語るものと云ふべし。

因果經に曰く、

過去の因を知らんと欲せば現在の果報を見よ、來世の果を知らんと欲せば現在の因を見よと。

吾人は吾人の云爲動作を以て業を作り、是の業によりて循環無窮に生れ又は死し、生死輪廻すると云ふは佛敎の輪廻說なり。

されば要を取りて之れを云はゞ、佛敎の輪廻說は、死後精神なるものがそのまゝ來世の肉體に移り住むものに非らずして、業なる一種の勢力を存しこの勢力に依りて新なる肉體を構成するものなり。

曇鸞大師の往生論註に、

穢土より淨土に生れし人を解釋して、穢土の人と淨土の人と一にあらず異にあらずと云ふものは、全く是の間の消息を說明せしものと云ふべし。

さりながら若し阿賴耶緣起と云ひ、眞如緣起と云ふの敎義より論ずるときは、佛敎より見たる靈魂論はまた異なりたる說明を爲し得べし。

今この一節を終るに臨み經論につきて靈魂に關する二三の文を揭ぐべし。

無明の父母と別れ第一義の山頂に登る。(無明とは業を起すの根基につきて名く。瓔珞經(別行本上十九丁)

問ふ、識は何の因緣の故に胎に入るや。

答へて曰く、行(業のこと)の因緣なり。行は卽ち是れ過古の三種の業なり。業が識を將ひて胎に入ること風吹きて炎を絕ち、空中にして去れども、炎は則ち風に依止するが如し「大智度論」(別行本九十卷十七丁)

若し先きの一世の無明業の因緣を知れば、則ち億萬世と雖も知るべし。譬へば現在の火熱すれば過古未來の火も亦た是の如し。若し無明の因緣より更らにその本を求むれば則ち無窮なり。則ち邊見に墮つ。(同上)

色は四大和合の故に散じて空となる。心も隨緣生の故に散じて空となる。

又汝言ふ、(數論學派の人が恒久純一の靈魂即我なければ來世の禍福を說く能はざるべしと云ふ疑問を指す。)今現在の人は識新々に生滅す。身命斷ずる時は亦諸行を盡す。誰か苦樂を受くべきかと。今當さに答ふべし、汝今未だ實の道を得ず。是の人諸諸の煩惱心の覆ふゆへに生因緣の業を作る。死の時は次第に相續して五陰(五蘊のこと)生ず。譬へば一燈より更らに一燈を燃すが如し。又た穀子の生ずるに三因緣あるが如し。地と水と種子となり。後世の身生する事もまた〳〵此の如し。(即ち肉體なり地に喩ふ。)有漏業(即ち業力なり種子に喩ふ。)有結使(煩惱なり、總稱して無明と言ふ。)との三事あるが故に、後の身生ず。是の中、身と業との因緣は斷つべからず。破るべからず。但だ諸の結使は斷つべし。結使斷つときは殘身殘業ありと雖も解脫を得べし。穀子あり地ありと雖も水なきが故に生せざるが如し。是の如く身あり業ありと雖も、愛結の水潤すことなければ即ち生せず。是を神(即我なり)なしと雖も亦た解脫を得と名づく。(大知度論第十二卷十八丁以下)

復た次に是の名色(名とは心なり、色とは物なり)和合するを名けて人と爲す。此の人諸結の爲めに(諸煩惱なり)繫がる、無漏の知慧を得て此諸結を抓解すれば是の時を人解脫と名づく。繩結び繩解くと云ふ如し。繩は即ち結なり。結に異なりたる法なし。世界の中に繩を結ひ繩を解くと說く。名色もまた是の如し。名色の二法和合して假りに名けて人を爲す。是の結使は名色に異ならず。但だ名づけて名色結び名色解くと爲すのみ。罪を福を受くること亦た是の如し。一法なしと雖も名色の爲めの故に罪福の果を受け、而して人に受くるの名を得。譬へば車に物を載するが如し、一々に之れを推すに竟に車の實なし。然れども車は物を載するの名を受く。名色は罪福を受けて而

も人はその名を受く。苦樂を受くることも亦た此の如し。(同上二十一丁)

魂神固と滅せず、但だ身自から朽爛するのみ。身は譬へば五穀の根葉の如し。魂神は五穀の種實の如し。根葉生ずれば必らず死すべし。種實豈終り亡ぶることあらんや。(牟子の理惑論「弘明集」に出づ。縮藏露帙四、三丁にあり。)

これ等は支那三國時代に當りて佛敎の全部未だ傳はらざる混沌時代にして、老儒の說と佛敎の一面寧ろ外道の數論學派に近き我論とを混合して、不滅を說くものなり。

若し形生じて即ち神生じ、形死して則ち神死せしめば則ちよろしく形殘へば神毀れ、形病めば神因すべし。

然るに死に臨んで神意平全なるものあり。(曾子のこと)牖より手を執りし惡む可き病の人にして(論語に出づ)德行の主を變ずることなきものあり。斯れ即ち不滅の( )なり。夫れ神とは何ぞや、精極まりて靈となるものあり。精極まれば則ち卦象の圖する處にあらず。故に聖人は妙物を以て言す。(乃至)今不可言の中に之れを依稀すれば、神とは圓應無生にして妙盡きて名なし。物に感じて動き、數を假りて行ふ。物に感ずれども物にあらず。故に物は化すれども滅せず。數を假りながらも數にあらず。故に數は盡れども窮らず(乃至)惑ふ者は形の窮るを一生に見る。便ち以て神情俱に喪ふと爲す。猶ほ火の窮まるを一木に覩て斯くすべて盡くると謂ふのみ。此れ曲に養生「莊子」の篇目の談に從ふ。遠くその類を尋ねるものにあらず。(乃至)冥緣の構は在昔に著し、明闇の分は形初に定まる。靈釣善く運すと雖も猶ほ性の自然を變ずる能はず。

是等の說は神とは今日の云ふ精神の如くに見ゆれどもまた眞如本體より顯れたるものと見ゆ。

要するに佛敎の業論と眞如論とを合せ持ち來りて老莊の神魂說に合採し、以て支那思想と印度思想との調和を計りしものと見るべし。

されど支那に於ける大乘初期のなれは明白に眞如又は業の說を叙したるにあらず。

生及び死の狀態

雜阿含經十三(二十)に曰く、

業あり、異熟あり、作者は不可得なりと。

意を取りて言はば、世の中に我等を作る神もなく、我身を支配する別箇の不思議の我もなし。但だ因果の理法に依りて我自身の業よく我が肉體と精神とを調和し集合し成長し活動せしむ。是の業によりて肉體と精神とを調和せし時、この身を假りに名けて自我と稱するのみ。

俱舍論頌に曰く、(收帙十丁十五)

我なく但だ諸蘊のみなり、煩惱業の爲す處なり、
中有により相續して、　胎に入ること燈焰の如し、
引くが如くに次第に增し、相續することは惑業に由り、
更らに餘世に趣く、　故に輪ありて初めなし。

更らに論文に於て是の偈文を解釋し、五蘊を名けて假りに我とすることは實に差支なしとて、詳かに生及び死の狀態を說明し、その業によりて輪廻する次第を說きて、十二因緣の敎義を出せり。之の十二因緣の如きは後にし、今は但だこの死と生とに關する說を列擧すべし。

最初に羯刺藍、次ぎに頰部曇を生ず。此より閉戸を生ず。閉戸より鍵南を生ず。次に鉢羅奢佉、後に髮毛爪等及び色根と形相と漸次にして轉增す。(收帙十丁十五)

是れ恐らく當時印度に於ける醫學上の說明なる可し。人の最初母胎に宿るときより出產に至るまでの間を分ちて五種の成長ありとなす。この表左の如し。

一、羯羅藍(譯云、凝骨)　二、頰部曇(譯云、皰)
三、閉　戸(譯云、輭肉)　四、鍵　南(譯云、堅肉)
五、鉢羅奢佉(譯云、支節)此時より稍具二手足形一

かくの如き胎中の變化は略壹週日に依りて起るものとし、第五節の位は最も長きものとす。論文に更らに說明して曰く、

此胎中の箭(胎兒を喩ふ)漸次に轉增して乃至色根形相滿する位に、業より起す所の異熟風の力によりて胎中の箭を轉じて、產門に趣かしむ。强き糞團の過量に秘澁するが如し。此より轉隨するに劇苦堪へ難し。其母の或時は威儀と飮食と執作と分に過ぎ、或は其子の宿罪業力によりて胎內に死す。(乃至)內は糞坑の如く最極の臭惡雜穢充塞し、黑暗の居する處の無量千虫の依止する處、常に穢汁を流す。恒によろしく厭ひ避くべし。精血垢膩潰爛臭滑不淨充溢し、鄙惡にして覩難し穿漏するとき薄皮以てその上を覆ふ(略)

更らに死の狀態を說きて云ふ。

惡道に生ずるものは、意識脚部に於て冷却し滅去す。若し人間に生るゝものは、意識臍部に於て滅し去る。若し又天道に生るゝものは意識心臟に於て滅し去る。然れども或は苦し病又は不意の件にて頓死するときは、意識は肉身の冷却と俱に滅し去るものとす。

尙今是處に古來より俗間に多く傳ふる斷末魔と天人の五衰とを記さん。

斷末魔とは死時に於ける最大苦痛として知られたるものにして、斷とはタチ切る漢字、末魔とは梵語にして、異支節と譯す可きものにして、人身中にあり一種の機關なり。若し此もの他より觸れ損せらるゝ時は大苦を受けて死するものとす。(冬帙一四十五丁眞諦譯俱舍釋論第八には斫末魔とせり)

五衰とは、天人に於ける斷末魔にして、一に衣服及び裝飾具より不可愛の聲を出す。二に身光闇昧なり。三に浴する時水滴身に着く。四に本心騷動となる。五に眼に瞬動あり。又更らに大五衰相として、一に衣服穢る、二に華鬘萎む、三腋下より汗出づ、四臭氣身に入る、五に坐處に於て坐するを得ず。是の五衰相を顯すときは必らず死すとす。

中有の説

中有とは舊譯には中陰と云へり。死して未だ生れざる間に於て、別に微細不可見なる一種の新しき身體を生ず。之れを名けて中有と言ふ。符秦時代の僧伽跋澄三藏の譯せる尸陀槃尼の著に成り「鞞婆沙論」に中陰論の一章あり。(收帙九八十七丁)是の説に依るに古來より中有に就きてかゝるもの無しと言ふ説と又有りと云ふ説と二説互に自説を固執せしものゝ如し。

鞞婆闍婆提　中有なしとする説

育多婆提　中有ありとする説

この無中有説の根據は經中に於て梵志命根盡、未至閻王所、中無頓至所、必往不可除と説き、又五無間罪作已增長無間必生地獄中と説けるにより、中に頓止所なしと云ふ語及び間隙なく直に地獄に有る等の語を以て中有なしとするの證となすなり。又有中有説は如何に説くかと云ふに、經中に三事合する故に母胎中に入りて生を受くと云へり。

三事とは、一に父母共會、二に母(　)時滿、三に有所堪任香陰已至(是の中に香陰とは梵語に健達縛と云ひ食香と譯すまさしく中有なり)

又經中に衆生此身を捨てゝ未だ餘所に生せず、衆生意に乘じて行す、未だ餘所に生せざる中は是れ中有なりと。

かく兩説を併べ擧げし後遂に中有ある説を取り、詳かに中有狀態を説明せり。

俱舍論の偈に曰く、

死生二有中、五蘊名二中有一、未レ至二應レ至處一、故中有非レ生。

之の偈を解釋せんに、四有の事を知らざるべからず。四有とは左の如し。

本有。生より死に至るまでの一身。

死有。將に死せんとする一刹那を云ふ。

中有。死して未だ生れざる間のもの。

生有。生時の初一刹那。

即ち死と生との間に中有と言へる別箇の五蘊あり。(魂魄のみと思ふ勿れ別箇の肉體と精神となり。但し微細なる故人間の眼力の及ぶ所にあらずと。)

之れを中有、中陰、香陰と云ふ。梵語の健達縛とはこの事なり。之の中有に居る間は全く香を以て食とす。即生きて口を以て食ひ、死しては鼻を以て食ふと云ふ可きか。而も之の中有に居るの時日は一七日とし、或は七七日とする等、諸説粉々たりと雖も、多くは四十九日即ち七七日を以て定説とするものゝ如し。(一七日とする説は一七日にして若し未だ生るゝ處を發見せざる時には中有の中に於て數々死して數々生るゝものとす)是れ佛敎徒の慣習として死人の仕ふるに香を以てし七七日の佛事を執行するを以て滿中陰など稱する根源ならんか。

俱舍論に云く、

中有の身は觸るべからず見るべからず、極細微あるが故に(第九世間品)

されど智識尤も敏捷なり(同上)

彼れ業力に由りて起す處の眼根遠方に住すと雖も能く生處の父母の交會を見て倒心を起す、若し男ならば母を緣として欲を起し、若し女ならば父を緣として欲を起す、是等の倒心を起すに由て便ち己が身愛する處のものと合すとをもへり、(乃至)是より中有即ち沒して生有起り已るを已結生と名く(同上)

天の中有は首を正しくして之れに昇る座より起つが如し。人と餓鬼と畜生との中有は各その生時狀に似る。地獄の中有は頭を下にして足を上にす(同上)

今且つ詳かに中有の狀態を説きたる偈文を擧げん。

俱舍論に曰く、

淨天眼に同じく見る。業逼疾にして根を具す。對無く轉ずべからず。香を食ふて久しく住するに非ず。倒心にして欲境に趣く。濕化は染香の處なり。天は首を上にし三

は横なり。地獄は頭を下に歸す。

是の意は如何にと云ふに、

中有の眼力の不可思議なることは天人の眼の如し。千里萬里の遠きをも見るべし。業の勢力により不可思議の力あり。最も捷疾に虛空を上下すること自在なり。之を最疾の業通と名く。業力の勢は佛陀世尊と雖も如何ともすべからず。而も一切の中有は皆眼耳鼻舌身の五根を具へたり。金鐵と雖も中有の往來を遮止する能はず。名けて無對と云ふ。赤紅炎燄の鐵を折破するに、その中に蟲ありて生息することありと云ふ。かゝる中にも生物ある上は、中有の勢力如何に不思議なるかを想見すべし。既に生るべき場處の中有決定せる時は、如何なるものも之を變ぜしむる能はず。之れ不可轉の勢力と云ふ。中有の食物は香氣にして住すること久しからず。生るゝ時は煩惱の倒心を起して生れんと欲する處に趣く。天人の中有は首を上にし、人間餓鬼畜生の三は首を横にし、地獄は頭を下にす。是れ偈文の大意。中有の說は終らん。

十二因緣の敎義

十二因緣とは楚語に尼陀那と云ふ。これ全く人類が自己の業を中心として生れ死し生れ死して、汲井輪の如く、輪廻無窮なることを說明し、假りに十二の分類を分ち、次第に生起し來る順序を示したるものにして、全く箇々別々のものにあらず。同一五蘊の集合物なれども、其五蘊中に於ける特異點を表出し、假りに人間が生より死に至るの狀態を示せるものなり。この表左の如し。

俱舍論に、

一、無明。諸の煩惱を總して無明と云ふ。

二、行。正しく業と同じく梵語の羯磨なり。

三、識。初めて生るゝ時の一刹那の五蘊を指す。

四、名色。胎中に宿りし以後未だ手足の形を具へざる時。

五、六處。既に眼耳鼻手足等を具へて未だ生れざる時。

六、觸。既に生れて後未だ火は燒き刄は斬る等を辨せざる時。

七、受。既に燒くもの斬るもの等を領知して未だ婬欲等なき時。

八、愛。婬欲等諸欲を起す時。

九、取。欲のため勉强して活動する時。

十、有。諸〳〵の希望のため活動するに依りて未來世の結果を起す業を作りし時。

十一、生。壽命盡きて死して來世に生るゝ時。

十二、老死。來世に於けるすべての活動を名く。

是の中、名色と言ふは、まさしく物質と精神との集合を意味するものにして、散斯克利土語にては(nimarupa)と云ふ。名の字は無形の精神を指すものにして、畢竟するに名と色との二を以て五蘊を略言したるものに同じ。前の生狀態の下に擧げたる揭羅藍等の母胎中に於ける前四位を指して名けたるものなり。若し實を云へば、十二因緣の一々皆名色ならざるはなけれども是の母胎中に於ける前四位の間は混沌たる一塊の肉團あるのみにして、別に特徵の表出すべきものなければ已むなく附するに名色の名を以てせしものなり。俱舍論に更らに佛陀が十二因緣を說き玉へる理由を叙し偈を作りて曰く、

前後中際に於て他の愚惑を遣らんが爲なり。

この意は前際とは過古なり。後際とは未來なり。中際とは現在なり。この三際に於て人或は愚惑を生じて云ふ、過古に於て我れ存在せしや否や、又未來に於て我れ存在すべきや否や、又現在に於て何物か是れ我れなりや。我は後に何物を有すべきやと。是の如き三世に渡りて惑へるものに對し、その惑を除遣せんが爲めに、十二因緣を說けり。この表左の如し。

一、無明
二、行
三、識
四、名色
五、六處
六、觸
七、受
八、愛
九、取
十、有
十一、生
十二、老死

一、無明 ｜ 八、愛
二、行 ｜ 九、取 ｜ 惑
十、有 ｜ 業
三、識
四、名色
五、六處 ｜ 十一、生
六、觸 ｜ 十二、老死 ｜ 事（又は苦果と云ふ。身體のこと）
七、受

前に擧げたる十二因緣の表を三世兩重の因果と名く。

「大乘唯識論」には二世一重の因果とす。

而も無明とはまさしく愛と取との二煩惱とその性質を同うし、行は有とその性質を同じうす。但だ便宜に從つて或は開きて說き或は合して說きて十二の分類を設けしのみ。若し輪廻無窮の因果を知らんとならば更らに之の表を見るべし。

無明 ｜ 因
行 ｜ 因
識
名色
六處
觸
受
果

一、無明
二、行
三、識
四、名色
五、六處
六、觸
七、受
八、愛
九、取
十、有
十一、生
十二、老死

一、無明 ｜ 八、愛
二、行 ｜ 九、取 ｜ 惑
十、有 ｜ 業
三、識
四、名色
五、六處 ｜ 十一、生
六、觸 ｜ 十二、老死 ｜ 事（又は苦果と云ふ。身體のこと）
七、受

前に擧げたる十二因緣の表を三世兩重の因果と名く。

「大乘唯識論」には二世一重の因果とす。

而も無明とはまさしく愛と取との二煩惱とその性質を同うし、行は有とその性質を同じうす。但だ便宜に從つて或は開きて說き或は合して說きて十二の分類を設けしのみ。若し輪廻無窮の因果を知らんとならば更らに之の表を見るべし。

無明 ｜ 因
行 ｜ 因
識
名色
六處
觸
受
果

識
名色
六處
觸
受
因
愛
取
有
因
生
老死
果
生
老死
因
無明
行
果

勝論學派の靈魂論

俱舍惠暉鈔に依り勝論が宇宙成立に關する大意を陳ぶべし。

六句義にして宇宙萬有を以て實德等の六個の範疇に總盡するもの左の如し。

一、實句。地、水、火、風、空、時、方、我、意の九種。

二、德句。色、味、香、觸、數、量、一、異、合、離、彼、此、覺、苦、樂、欲、瞋、勤、勇、重、海、潤、行、法作、聲の二十四種。

（十句論には一異作の三種なし別に體、液體、非法の三種を擧ぐ。）

三、業句。取捨屈伸行の五法を以て體とす。

四、同句。又は總相諦と云ふ。

五、異句。又は別相諦といふ。

六、和合句。又は無障碍諦といふ。

要するに實と德との二句は實質資料にして是れを同ならしめ、或は異ならしめ、和合せしめ、作業せしむる一物あり。之を後の四句とす。是の內業句のみ無常なれども他は皆常住不滅のものとす。後に出てたる慧月論師は更に、

有能句、無能句、俱分句、無說句の四句を附加して、十句を立てゝ宇宙萬有を總該すと稱す。而して第四の同句以下皆常住の不滅の物體なりとす。この物質資料たるべき實とは眞實の義にして、まさしく萬物の靈たる物を指し德とは德義の義にして實句の上に所有する功能を云ふ。

而して實句の九種の中、常住不變の性質を有せるものは空時我意と地水火風の一部分とす。換言すれば九種の內、更に地水火風の一部分のみ變異無常の性質を有するものにして、其他は皆常住不變の實在物なりとす。何故に地水火風の一部のみかく常住不變なりやと云ふに、物質の元素は地水火風の四種なれども、この四種の元素各々有細分、無細分の二種あり。無細分とは根底の元素にして形質の更らに捕ふべからざる最後の微細分子なり。有細分とはその父母微已上にして形質の既に方位を分つべきものあるものなり。父母微合して子微孫微の如き稍や看取し得べきの分子となれると云ふものなり。この無細分の父母微は常住不度にして天地間に彌漫するものとし、有細分の分子は生滅無常なるものとす。

さて常住實體九種の中、空と時との二は空間時間の二にして、無限大なれども、動作あるなく、勢用あるなし。方と云ふもまた空間に於て東西南北の方位を示す因となるのみにして、動作なく勢用なし。この元素は集散離合すれども滅することなし。若し但に斯くの如く說くのみなれば殆んど唯物論の如くなれども、是外に精神にあらず物質にあらず而も常住不滅の我と意との二種を說き、その我を以て形體なくして宇宙に遍滿せる實在物とし、覺と樂と苦と欲と瞋と勤勇と行と法と非法との九德を所有し和合せしむる作用ありとす。

是れ全く物心二元論の範圍に屬すと稱すべし。然れども彼れは是の外尙「意」實句

ありて心界よりも寧ろ物界に屬するものとし、その形芥子粒の如く二個の極微を合したる程の大きさにして、我等の肉身中に存在し、「我」の道具となりて前に擧げたる九德を起す原因を爲す作用を有すとす。「十句論」に云ふ九德の爲めに不和合因緣となるとは是れなり。

されば全く精神作用として見るべきは德句中の覺と樂と苦と欲と瞋と勤勇の六種なり。「我」はまさしく是等精神を支配し法非法即善惡の種々なる事業を爲さしむる根本精神にして、是の根本精神を助げて活動せしむる芥子粒大の「意」の勢力に依るものとす。而もこの奇妙なる「意」は形體肉身の離合集散に關せず、「我」と共に常住不變なりと云ふは、誠に珍妙の感を起さしむ、殆んど笑ふ可き珍奇に屬すれども、深く考思すれば是の「意」によりて殊に「我」的靈魂の不滅なることを感ぜしむること薄しと雖も、物心兩界の間に於てこの芥子粒大の或る物を持ち來りて殊に我れ自身の永久存在を思考せしむる好資料となすに足るものあり。幼稚なる哲學思想として物心兩界の關係を連鎖する關鍵たるものと云ふべき歟。

勝論學派の詳細なる解說は之を他日に讓り、今は但だ吾人の永久なる靈魂として精神的我と物質的意との二種を說いてその不滅を立言せるものなりと言ふを以て勝論派の「我」論を終る。

數論學派の靈魂論

數論學派に於ては二十五諦を說きて萬物を總收す。冊五とは自性諦と我諦と大諦と慢諦と心根と五塵と五作根と五知根と五大とにしてこの五塵五作根五知根五大との關係は左の如し。

五知根　五塵（又は五唯）　五大　五作根（是の五作根は一々上の五知根全體と相應して種々の作業を爲す）

耳知根——聲塵——空大——舌作根

皮知根——觸塵——風大——手　根

眼知根——色塵——火大——足　根

舌知根——味塵——水大——人　根（佛教に男根女根と稱す）
鼻知根——香塵——地大——大遺根（肛門）

五知根とは即ち五官の作用にして、五作根とは人身中に於て五官機能の外更らに著しき事業を爲すものを敎へたるものなり。殊に舌に於て飲食の味を知るを舌知根とし、言語音聲の作用を爲す舌作根となしたるものなり。是の外に「大」とは事物を決擇する心的作用に名け。慢とは我が色なり我が味なり我が衣服なり等と執着する心的作用に名け、「心」とは能く分別するの義にして五知根五作根の作用と同時に聲を聞き言語を發する等の知覺をなすものにして、また心的作用なり。

されば二十五諦中の最初の自性諦と我諦との二種は物心兩現象外の或る物なれども他の二十三諦は全く物心兩界の分析なり。この表左の如し。

心界——大諦慢諦心諦の三諦。
物界——五知根五作根五塵五大の二十諦。

是の二十三諦は皆生滅無常のものにして、自性諦より生じ來たるものとす。是れ全く勝論派が物質界の萬物は皆地水火風の四元素より生ずるものなりと說けるに異なりて、物心兩界の總てを但だ一の自性諦より生じ來ると說くより見れば、非常に進步したる一元論に似たりと雖も、自性諦の外に更らに常住不滅の神我諦を立つるより見れば、全く二元論也。然れどもこの「我」は勝論派の如く苦樂の業を造る作者の性質を具へずして、但た苦樂の境を受用し覺知する受者知者の性質を有するものなりとす。之れを表すれば左の如し。

自性——作者　　覺知の性なし。
神我——知者（又は受者）　能造の性なし。

自性は本有にして從生する所なしと云ひて本然に存在するものにして、是の者が何故に作者となりて萬物を造るやと云ふに、「俱舍論惠暉鈔」には、自性の別名を三德と名くと說きて、是の自性に三德の性を具ふ、三德とは薩埵と刺闍と答摩なり。

薩埵とは飜譯すれば有情の義にして、善良の義を取る。刺闍とは飜譯して塵とす、活動の義を取る。

答摩とは闇鈍と飜譯すべきものなり。物的色の元素としては黃赤黑にして、心的元素としては喜憂闇又は貪瞋痴なり。其の表左の如し。

薩埵——勇（新譯）——喜（舊譯）——貪（新譯）——樂（舊譯）——黃（新譯）——染（舊譯）——善良
刺闍——塵——憂——瞋——苦——赤——麁——活動
答摩——闇——闇——痴——捨——黑——黑——闇黑

卽黃赤黑が總て物質的色法の原因となり、貪瞋痴が原因となりて總ての心的狀態及樂苦捨の三世界を生ずるものとす。三世界とは天と人間と禽獸とにして、薩埵の德が重き時は天世界に生じ、刺闍の德厚きときは人世界に生じ、答摩の德多ければ禽獸世界に生ずるものなり。その生ずと云ふは自性諦の外に更らに別物を造るにあらずして、自性諦それ自身が轉變して大諦慢諦五塵五根等となり以て三世界を造る者とす。

「金七十論」に

世間の生と云ふに二あり。一に轉變生にして乳等より酪等を生ずるが如し。二に非轉變性にして父母の子を生ずるが如し。自性の生は轉變性なりと云ひて、

是の轉變したるときには自性諦を勝性と名け、以て轉變前の自性に分つ。かく轉變されたる二十三諦は離合集散の生滅を免れざれど、自性諦は依然として不生不滅にしてその本性を失はず。これ殆んど佛敎の眞如緣起なるものに類すと云ふ可し。

然れども但に作者なるのみにして、知者たる覺知的作用を有せざるものとすることは能く留心すべき所にして、是れが爲めに、更らに自性諦と對立して、知者の作用を有する神我諦を設け來らざるを得ざるなり。何が故に「我」ありや云ふに金七十論に五つの理由を擧げて「我」の存在を主張す。

我れの存在せる五理由とは何ぞと言ふに、偈を說いて曰く、

聚集他の爲にする故、三德と異なると依との故に食する者と獨離の故に五因「我」

の有を立す。

（一）聚集他の爲めにする故にとは、世間を見るに一切の聚集は皆他の須要に應ず、牀席等を集むるは牀席それ自身の必要に依りて集むるに非らず、瓦を集めて屋とするは瓦自身の爲にするにあらず、皆人の須要に應じて起るものなり。地水火風空の五大聚まりて身體を組織す。五大それ自身が身體を要するに非らず。必らず之を要するの「我」なるべからざるなり。是の故に自性及び二十三諦の外に「我」れなかるべからず。

（二）三德に異なるが故にとは、是の異なるに六種あり、

一に三德に異なり即二十三諦と自性とが俱に三德の性を具ふれども「我」にこの性なし。

二に相離れざるに異なり、謂く三德卽ち二十三諦とは牛と馬とが其體一なるべからざるに同じからずして、二十三諦と三德とはなるを得べく、三德と自性と其體亦た然り「我」は不相離の義なし。

三に塵異なりとは、二十三諦自性とは俱に「我」の爲めに認識せられ受用せらるゝものなれば、塵と名づく。我は能受者にして被受性のものに非ず。

四に平等異とは一婢僕が衆多の主人より同く共に驅馳せらるゝ如く、自性と二十三諦と同じく共に衆多の我れに受用せらるゝを平等と名く。「我」は主宰者にしてかゝる相なし。

五に無知とは自性及二十三諦は樂苦闇痴を認識する能はざれば無知と名く。「我」若し無んば世界に認識の知なかるべし。

六に能生本末似異とは、「自性」の大を生ずる如く、「大」は「我慢」を生じ、我慢は五大五塵を生ず。生因となること本たる自性と末の二十三諦とはよく似たり。之れを能生本末位と名く。「我」はこの相なし。

（三）依の故にとは自性諦が末の大等を生ずる作用を起すは全く「我」之に依るを以てなり。「我」が自性諦に依らざれは自性に能生の作用なし。死したる身體が事業を

爲す能はざるが如し。

（四）食するものゝ故にとは、世に六味の飲食あれば必らず別に能食者あるを知る。大等は皆受用せらる可きものにして飯食の如し。必らず別に能食者あるべし。これ「我」を要する所以なり。

（五）獨離の故にとは、若し但だ身體のみあらば、惡を爲して罪を受くるものなく、善を爲して禍を受くる者なかるべし。即一切の教訓悉く無用となるべし。

以上五箇の理由を以て「我」の存在を主張し神我諦は自性諦と共に一切の處に徧在して常住不滅なりとし、但だ自性諦は一なれども「我」は多にして「人々別の「我」を有すとす。而してこの「我」は常に自性に合する故に種々の活動を生ずる時、自性は知者の如くに見へ、「我」は作者の如くに見ゆ。これ世間に「我」を以て作者と見做す所以なりとし、偈を說いて曰く、

三德人に合する故に無知なれども、知者の如し。三德能作の故に中道は作者の如し。

（三德は自性なり中道は神我なり）

更らに譬喩を說いて、一の土器本と冷熱の性なけれども火に合すれば熱に水に合すれば冷となるが如しと云へり。尙ほこの自性と「我」との和合する理由につき面白き譬喩を出す、曰く、

昔し商人隊あり優禪那國に行く路に盜に遭ひ、各々分散して走る中に、盲人と跛者あり、衆人棄て去り盲人妄りに走るのみにして跛人は徒らに座して看るのみ。跛人問ふて曰く汝何人ぞ。盲人曰く我れは生盲にして道を知らず、所以に妄りに走る。汝は復た何人ぞ。跛人曰く生れながら跛者なり。唯よく道を看るも走る能はず。今汝まさに我を肩上に負ふ可し。我れ能く路を導かん。汝は我れを負ふて行くべし。即ち二人能く死を免るべしと遂に二人和合して逃る。（云々）

是の喩中の跛人は神我諦にして盲人は自性なり。「我」は知者なれども造物の作用なし。玆に於てか自性諦の盲人を呼んで曰く、汝我が爲めに顯現せよと。この「我」意

を受けて盲人は走りて大慢等の作用を起し來る。恰も父母和合して子を生ずる如くに二者よく和合して社會萬般の現象を生じ來るものとす。偈を作りて曰く、

我は三德を見んことを求む。自性は獨尊を爲さしむ。跛と盲人と合するが如し。

義に依りて世間を生ず。

この一偈全く數論の精髓にして「我」と自性との相互關係を示し以てこの二元相依りて萬象を生じ來たるを示すものなり。是の「我」は本性解脫せりとて、本と自由自在の靈知なれど、かくの如く境界を見ん事を求むるが故に、遂に境界の爲めに縛せられ自由なる事能はず。若し「我」境を思はざれば自性また末の大等二十三諦を作らず。但に自由清淨なる事を得。この自由清淨の地に至らんが爲めに修行を敎ゆるものは數論派の敎訓なりとす。

以上の所說を該論すれば、數論派の靈魂は勝論の如き芥子粒大の「意」を持ち來りて存在の觀念を明白にするものなく、但肉體の外知覺作用の外に別に肉體と知覺とを主宰し統括する永劫不滅の物體ありとす。しかもこの物體は無形にして捕捉すべき形容を有す。「自性」の如く結んで萬象となりて伸縮離合する事なく、常住不變にして天地間に彌漫せる個々別々の一活物なりとす。

かくの如く吾人の肉體を支配するものは無形にして無限大なりとしては、尙明白に靈魂不滅の印象を記せしむる能はず。玆に於てか吾人の想像に尤も容易なる不滅の印象を與へしめん爲め、更らに第二靈魂とも名くべき細身不滅論を稱ふ。細身とは何ぞ、吾人はまさに章をかへて說明すべし。

（以下次號）

鎌倉に於ける上人の片鱗

松田貫了師談
一學生錄

辨榮上人鎌倉千珠院御留錫中、松田師も隨伴せし或日のこと日蓮宗國柱會信徒の猛々しき壯漢二三名上人を訪ね、非常の見幕にて上人が念佛を弘むるは國家の爲め不都合なりと、切りに詰り寄る 勢凄しかりしに、上人は之には何等答ふる所なく、ええなんで如來の光明は神聖正義恩寵の云々と、如來光明のゆはればかり靜かに說き立てゝ、間を切らさず、說き行く內に件の壯漢のいかめしき樣子は次第に和ぎ、今にも摑みかゝらんかと思はれし人達は、皆感心して御辭儀して歸り去りぬ。

辨榮御上人の御臨終の御樣子

吉岡性空師談
一兒童記

辨榮御上人樣は御念佛のありがたい御話をして諸國を御まはり下さいました。今、現に御上人樣の御導きで御念佛に生かされ日々歡び喜んで働いて居る人々が何千人あるか分りません。御上人樣はほんとうに貴ひゐらい御方であります。

大正九年十二月四日午前六時六十四歲にて柏崎極樂寺で御なくなりなさいました。その貴ひ御話しを致しませう。

御上人樣は御病氣中、唯南無阿彌陀佛〳〵と御念佛ばかり申して御いでなさいました。また看護婦さんや附添の方々に暇さへあれば御念佛の貴い御話をして下さいました。

三日の夜八時頃に御息づかいが變だと云うので私共一同が御病室に集りまして御念佛を申して居りました一時間もたちますと御上人樣はもうよいから皆やすむようにと仰せなさいましたので看護婦さんや附添の方々を殘して一同が引き下がりまして別座敷で休んで居りました。十二時頃に御上人樣の御容體がかわつたと言ふので一同は御

病室へ參りまして御念佛を申して居ります内に御上人樣はすや〳〵と御やすみになる樣子でありましたから一同また引き下がりましてやすみました。

四日の夜(午前五時半)御上人樣の御念佛の御聲が强く〳〵聽へましたので一同は驚ひて御病室にはせ參りまして御念佛を申して居りました。此時御上人樣は右の御手でとん〳〵とふとんを御打ちなさいますのですぐに木魚を持つて來て貰ひまして今度こそは御上人樣の御臨終と涙乍らに念佛して居りました。その時の有樣は丸るで御上人樣に御念佛の調子を取つて頂ひて居つたのでありました。暫くすると御上人樣には右の御手にて空中に一圓相を御畫きなさいましたかと思ふうちに兩手で三昧定印を御結びなさいました。(三昧定印は圖にて示す)此間約四五分をたちますと御上人樣には底力ある御聲でナーム(一息)アーミ(一息)ダーブ(一息)ナーム、アーミ、ダーブ、〳〵と十返ばかり御唱へなさいまして御念佛の聲もろとも御なくなりなさいました。私は此貴ひ御上人樣の御臨終を拜ませて頂いた事を一生の思ひ出と喜んでをります。その御上人樣の底力ある御念佛の御聲が今に耳に殘つて居ります。ドウゾ此貴ひ御話しを御互に覺へて居りませう。

行誡上人の袈裟附屬

辨榮上人御法弟
館林善導寺主　塚田英亮師談

行誡上人御遷化の前二十五條の袈裟を辨榮上人に附屬し態々送り來りし事を目擊せしが今いづこに在るものか、行誡上人はその遺法傳持の任が辨榮上人にあることを示されしものにて御墨付きも附き居たりしものなり。

昭和四年十一月廿八日印刷
同　三十日發行
年七冊制は廢止
年拾貳冊　貳圓(郵稅共)
編輯兼發行人　山崎辨成
印刷人　東京市小石川區餌坊町五五　小林七太郎　電話小石川一四九五
發行所　東京市小石川區水道端二ノ四四　ミオヤのひかり社　振替東京六六八五一番